

手術についての説明内容

平成 年 月 日

病 名	(右 ・ 左) 乳 癌	
術 式	(右 ・ 左) 乳房温存術	
手術法の概略	腫瘍を中心に腫瘍辺縁より 2 cm 離れた範囲で乳房を部分的に切除し、腋窩のリンパ節を郭清する方法です。 乳頭・乳輪は温存する方針ですが術中組織診断の結果によっては切除が必要になる場合があります。また腋窩へ細いドレナ - ジチューブを挿入します。術後は残存乳房に放射線照射を行います。	
麻 酔 法	全身麻酔	局所麻酔
輸血の必要性	有 ・ 無	
予定術者		
起こり得る合併症	出血、皮下血腫の形成、創部の感染とそれによる治癒の遅れ 上肢の知覚障害・運動障害、 上肢のむくみ、リンパ液の貯留、 疼痛、皮膚のやけど、乳房の変形 など	
添付資料	有 () ・ 無	
患者さんからの 質問と 医師の説明	患者さんからの質問	医師の説明
(他の治療法の選択 についてなど)	胸筋温存乳房切除 (全乳房切除) 化学療法 放射線療法 ホルモン療法	

乳腺一般外科 説明医師

乳房温存療法についての説明内容

1. 乳房温存療法とは

乳房温存術の後に残存乳房に対し放射線照射を行うものです。(現在、温存術後には放射線治療を行えない一部の患者様を除き全症例において残存乳房照射を行っております。)

2. インフォームドコンセントに必要な事項

病名が乳癌であることを知っていただく。

癌の進行度とその基本的な治療方針について知っていただく。

乳房温存療法の概要

乳癌の治療には局所療法と全身療法があり、本療法は局所療法の 1 つとして行われます。この治療法では残存乳房に再発の可能性があること、手術中および手術後の病理組織診断によっては全乳房切除への術式の変更や乳房の追加切除が必要になることがあります。(切除断端に癌の遺残が認められた場合)。また術後の残存乳房への放射線照射は残存乳房再発を予防する目的で行われます。

3. 乳房温存療法の適応

1999 年の日本乳癌学会によるガイドラインに基づき以下の条件を満たしている症例に対し乳房温存療法を行っております。

腫瘍(癌)の大きさが 3cm 以下であること。

癌が周辺に拡がっていないこと。(広範な乳管内進展の所見がないこと)

癌が多発していないこと。

放射線照射が可能であること。(重篤な膠原病、同側胸部放射線照射歴、患者様が照射を希望されていること。)

患者様がこの治療方法を希望されていること。

4. 予想される合併症

手術に伴う合併症

術後出血、患側上肢または腋窩の疼痛・知覚障害、リンパ液の貯留、患側上肢のむくみ、創部の感染・治癒遅延、乳房の変形など。

放射線照射に伴う合併症

皮膚の発赤、色素沈着、乳房の張れ・疼痛、食欲不振、白血球減少など
(これらは一般的には一過性の症状です。)

皮膚のざらつき、乳房硬化、放射線肺炎、肺線維症、まれに肋骨骨折。